『ファブリカ』における歯の形態学の記述について

本間邦則

現在用いられている歯の名称 incisor, canine, cuspid, bicuspid, molar などの由来について追究してゆくと、アンドレアス・ヴェサリウス Andreas Vesalius の主著ファブリカ『De Humani Corporis Fabrica (1543)』にまでさかのぼることができる。ヴェサリウスは近代解剖学の祖として尊敬されており、その主著は当時の水準をはるかにこえて近代解剖書としての形式をととのえたものとして知られている。『ファブリカ』には歯の形態学についての記載も詳細である。

歯の形態の特徴をとらえて、Dentes incisorij, Dentes caninus, Dentes molares, Dentes capitis などの名称をあたえている。そして、上顎大臼歯の歯根は三根であるが、稀に四根を有すること、下顎大臼歯は二根であるが、稀に三根であること、小臼歯の歯根は、上顎は二根、下顎は一根であるのが一般的であること、犬歯の歯根は、全体の歯のなかでもっとも長いこと、中切歯は側切歯よりも大きく、幅もひろく歯根も長いこと、小臼歯・大臼歯の総計は片側片顎に五本そろうとは限らず、四本の場合もあること、その場合は最後の大臼歯（智歯）により支配されるもので、この歯は萌出しないで骨内に埋伏していることも往往にしてあり得るということを説明している。また、歯髄腔は歯の栄養のために存在すると述べている。

ヴェサリウスは、骨格標本をつくるとき、骨と骨とをつなぎあわせるのに、骨に小さなあな（孔）をあけるとき、歯科用ドリルを応用すると便利であると説いているのは興味あることである。

（日本歯科大学新潟歯学部）